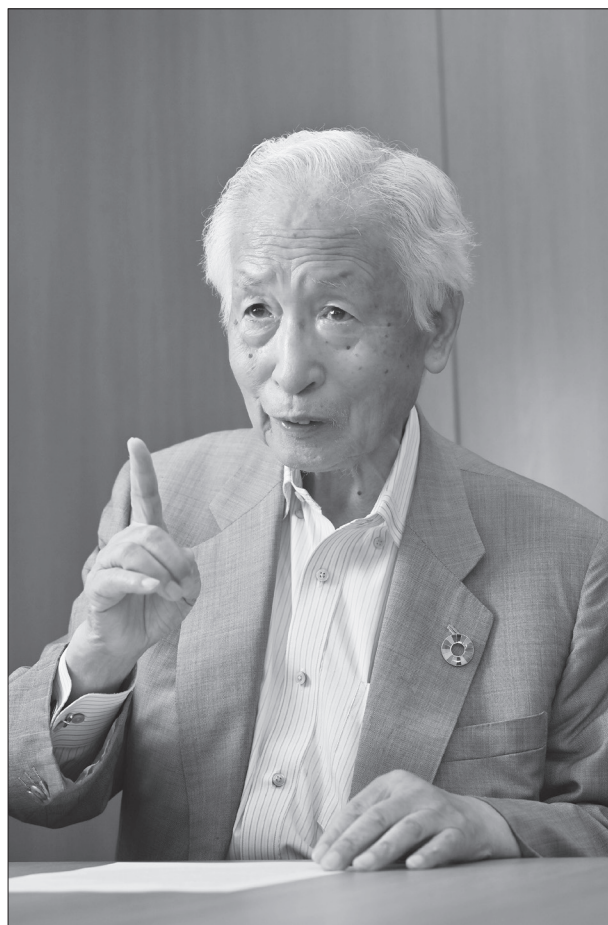




小長 啓一

元通商産業省 事務次官
弁護士

国政選挙で自民党の敗北が続く、連立政権が苦境に立たされている。海外ではロシアによるウクライナ侵攻が続く、米国トランプ政権との関税交渉も一応の決着を見たと言っても、不透明な部分が多い。国内も少数与党政権で、物事が決まらない事態が続いている。最近では新興政党への支持が高まっているが、これも国民が難局を打破する為、新たなリーダーを求めている証左だろう。今の日本で、どのような政治家が求められているのだろうか。嘗て、故・田中角栄首相の秘書官として、政治の現場を官僚の立場から見て来た元通商産業省（現・経済産業省）事務次官で、弁護士の小長啓一氏に田中氏の政治姿勢やリーダーに求められる資質等を聞いた。

集中 OPINION

田中角栄に学ぶリーダーの4つの力
国益を守る決断力を現在に生かす

——通産官僚の道を選ばれたのは、どのような理由からだったのですか。

小長 私は13歳の時に大阪陸軍幼年学校に入り、将来は将校となってお国に尽くすつもりでしたが、終戦を迎えて故郷に戻り、旧制西大寺中学（現・西大寺高校）を経て旧制第六高等学校へ進学しました。1949年の学制改革で発足した新制岡山大学に第1期生として入学し、在学中に国家公務員上級職（法律職）試験と旧司法試験に合格しました。元々、卒業後は役人となり行政に携わりたいという思いが

ありました。父親は学校の教員であり、大学では先輩の伝手も無く、国の省庁の実際の業務について

深い知識が有った訳ではありません。そうした時に、大学の恩師から「通商産業省（当時）は世の中や世界の動向に機敏に対応し、比較的自由な雰囲気がある。中央官庁を目指すのなら通産省が良いのではないか」と言われた事があり、そうした役所であれば受験してみようと思ったのです。

——試験にはどの様に臨まれたのですか？

小長 面接では試験官が受験生を取り囲み、議論を

する様な印象を受けた。そこで「何故通産省を受験したのか」と尋ねた。

「資源に乏しい日本は、貿易で稼いでいくしか生きる道はない。その道に力をつくした人、門家に触れた人、臆する事無く堂々とした人、臆目でも弁舌臨めたのも、



の琴線に触れた人、臆目でも弁舌臨めたのも、

続きを読むには購読が必要です

——故・田中角栄氏の通産大臣（当時）時代から首相